香川県立保健医療大学リポジトリ

カンボジアにおける保健衛生指導活動に参加した学生の経験

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, よしみ, 小林, 秋恵, 三木, 佳子, 堀, 美紀子, 森西, 起也, Tsuji, Yoshimi, Kobayashi, Akie, Miki, Yoshiko, Hori, Mikiko, Morinishi, Tatsuya メールアドレス: 所属:
URL	https://kagawa-puhs.repo.nii.ac.jp/records/213

カンボジアにおける保健衛生指導活動に参加した学生の経験

辻 よしみ[1)*]，小林 秋恵[1)]，三木 佳子[2)]，堀 美紀子[1)]，森西 起也[3)]

[1)]香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科
[2)]聖カタリナ大学人間健康福祉学部看護学科
[3)]香川県立保健医療大学保健医療学部臨床検査学科

要旨

2017年～2019年の間，カンボジアにおける「保健衛生指導者育成プロジェクト」にアシスタントとして参加した学生５名の経験を明らかにするためにフォーカスグループインタビュー（focus group　interview：以下 FGI）調査を実施し質的記述的に分析した．その結果，学生の経験は以下の４項目に分類された．

①カンボジアの土地や人との交流による体験
　この体験を通して，日本人との教育環境や文化の違いを体感し，カンボジアの人々の前向きな姿勢から自己の消極的な姿勢に気づいていた．

②保健衛生指導の体験
　保健衛生指導の実践では，日本では当たり前になっている保健衛生がカンボジアでは違うということを理解した．また，保健衛生指導の準備，計画，実践の経験から効果について実感していた．

③保健衛生指導の実践から得た学び
　保健衛生指導から，日々の生活で精一杯なカンボジアの人々の現実が見えてきていた．それでも，懸命に学習したいというカンボジアのスタッフの態度を感じていた．

④自覚・自律の芽生え
　これらの体験を通して，真剣に講義に参加すること，責任を持った看護師になるという覚悟をもてていた．更に国際貢献に積極的に関わりたいという思いや専門職としての自律も芽生えていた．

国際交流において，海外といった異文化の中で直接体感し，目的を持ち自ら様々な経験することが学生としての自覚や自律を促すことが明らかになった．

Key Words：国際交流（international exchange），保健衛生（health and hygiene），学生（student），経験（experience）

はじめに

国際社会の中で活躍できる保健医療従事者の育成は重要な課題である．また，保健医療従事者の「国際交流」は多様な文化の理解や社会・生活の理解といった医学・看護の基本となる部分を担っており，本学の教育目標にも，「地域や国際社会の特性や問題を広い視野で理解し，多様な保健・医療・福祉の課題に適切に対応し，保健医療の向上に主体的に貢献できる人材を育成する[1)]」と掲げられている．

看護師や臨床検査技師といった保健医療従事者を育成している本学では，諸外国との国際交流を展開する中で，2017年～2019年の間，計５回の公益社団法人セカンドハンドの主催するカンボジアにおける「保健衛生指導者育成プロジェクト」（以下，プロジェクトと略す．）に教員及び学生が指導者及びアシスタントとして参加する機会を得た．

そこで，本研究ではプロジェクトに参加した本学学部生の保健衛生指導活動に参加した学生の経験を明らかにし，今後の国際交流のあり方を検討する一助とすることを目的とする．

*連絡先：〒761－0123 香川県高松市牟礼町原281－1 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 辻よしみ
E-mail : tsuji@chs.pref.kagawa.jp
＜受付日 2020年10月１日＞　＜受理日 2020年12月９日＞

プロジェクトの目的

セカンドハンドが2003年から資金援助を行っているカンボジアバッタンバン州にあるホームランド孤児院では，現地指導者が常時30名～60名ほどの子ども達のケアを行っている．プロジェクトでは，子ども達が日々の保健衛生を改善すること，予防行動の習慣化に対して現地指導者が保健衛生の知識や技術を学び，衛生教育を実施できるようになることを目的としている．

カンボジアについて

カンボジアは，1979年のポルポト政権崩壊後は，再生カンボジア王国が成立して以降，経済成長は続いているものの，いまだ経済的には世界最貧国の一つであり，医療や衛生の分野でも大幅に整備は遅れている．2020年現在，国連総会の決議により，特に開発の遅れた国（後発開発途上国）として指定されている[2)]．

人口は，2018年において約1,600万人，人口成長率は1.5%となっている[3)]．

アシスタントについて

研究対象者であるアシスタントについては医療に関する基礎的学習を履修済みの３～４年生の学生を主に参加対象として公募した．

アシスタントの渡航にあたっては，事前にプロジェクト目的，内容，現地での生活に関してセカンドハンド担当者からのオリエンテーションを実施した．また教員と共に地区診断の理論モデルであるコミュニティアズパートナーモデル[4)]を参考に，現地の政治，保健，教育，歴史，文化，環境，交通，経済等の項目について，学内の既存資料及びインターネットを用いて情報収集及び整理を実施し，カンボジアに関する理解を深めた．更に現地で実施予定の保健指導内容（手洗い・歯磨き等）に関する情報収集及び教材準備や事前学習を実施した．

現地での保健衛生指導においては，教員の指導の下，現地指導者とともに協力して保健衛生指導の企画・計画・実践・評価の一連の流れを経験した．

研究目的

カンボジアにおける保健衛生指導活動に参加した学生の経験について明らかにする．

研究方法

1. 研究デザイン

フォーカスグループインタビュー（focus group interview：以下 FGI）調査による質的記述的研究である．

2. 研 究 対 象 者：

２年間のプロジェクトにアシスタントとして参加した学生は延べ８名（１名は２回渡航）である（表１）．その中で，インタビュー協力者を募り，同意が得られた本学学部生４名及び卒業生１名の計５名を対象とした．

3. データ収集時期

2019年８月

4. データ収集方法：

現地保健衛生指導者の育成プロジェクトでの経験を語ってもらうため，以下の内容について FGI を行った．

①本プロジェクトに参加して印象に残っていること．何を経験し，何を感じ考えたか．

②本プロジェクトに参加して得られた学びとそれを何に活かせるか．

③自分が気づいたプロジェクト対象者の変化や効果．

④国際交流を実施しての自身の変化と内容．

表１ 保健衛生指導者育成プロジェクト参加内容

	日程	プログラムテーマ	プロジェクト参加者
第１回	2017年 ９月９日～18日	地区視診 手洗い指導	看護学科教員 看護学科３年生 看護学科３年生
第２回	2018年 ３月５日～９日	保健衛生環境調査	臨床検査学科教員 看護学科３年生 臨床検査学科２年生
第３回	2018年 ８月24日～９月２日	歯磨き指導	看護学科教員 看護学科２年生 臨床検査学科３年生
第４回	2019年 ３月４日～８日	目の手当 傷の手当	看護学科教員 看護学科４年生 看護学科２年生
第５回	2019年８月	活動評価	看護学科教員

FGI の実施状況

実施時期は校内に学生が少ない夏季休暇中とし，外部からの騒音等の影響の少ない場所を選定し，香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科の講義室にて実施した．

座席の配置に関しては，全員の顔が見えるように机を設置した．また，できるだけ和やかに話してもらうように，お茶を用意した．司会者は，香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科の本プロジェクトに参加した研究者１名が担当し，他の教員２名は観察者として参加した．FGI に要した時間は，１時間10分であった．討議内容は IC レコーダーにて録音した．

5. 分 析 方 法

FGI の分析は，インタビュー内容を逐語録におこし，学生の経験と自身の変化を発言していると思われる文章を抽出した．その後，抽出された内容について，意味内容が類似しているものをグルーピングし，各項目について何段階かでサブカテゴリー，カテゴリーに分類した．

その結果から学生の経験について検討した．分析過程において，質的研究の指導経験のある研究者とともに共同で実施した．

倫理的配慮

FGI 実施前に，研究対象者に対して，書面と口頭により研究計画及び研究協力は任意であり途中で辞退も可能であること，得られたデータは，すべて匿名化し固有名詞や個人が特定されることがないこと，研究目的以外には用いないことを説明し同意書により同意を得た．

また，FGI 実施後，データはすべてコード化し，個人が特定できないようにし，研究責任者が鍵のかかるロッカーで管理した．

本研究は，香川県立保健医療大学研究倫理審査委員会にて承認(番号286)を得て実施した．

結　　果

1. 研究対象者の属性

本研究の対象者は２年間のプロジェクトにアシスタントとして参加した学部生５名(卒業生１名含む)であった．研究対象者は FGI 調査時，看護学科学生３名，病院看護師１名，臨床検査学科学生１名で，全員女性であった．本プロジェクトに参加するまでの海外渡航歴のある者は４名であった(表２)．

表２　研究対象者

	所属	渡航時学年	性別	海外渡航歴
1	看護学科	３年生・４年生	女性	有り
2	看護学科	２年生	女性	無し
3	臨床検査学科	３年生	女性	有り
4	看護学科	４年生	女性	有り
5	看護学科	２年生	女性	有り

2. 保健衛生指導活動に参加した学生の経験

インタビュー内容で学生の経験と自身の変化を発言していると思われる文章をピックアップした結果，①カンボジアの土地や人との交流による体験，②保健衛生指導の体験，③保健衛生指導の実践から得た学び，④自覚・自律の芽生えの４項目に分類できた．

①カンボジアの土地や人との交流による体験は，５カテゴリー，11サブカテゴリー，②保健衛生指導の体験では，４カテゴリー，17サブカテゴリー，③保健衛生指導の実践から得た学びは，８カテゴリー，17のサブカテゴリー，④自覚・自律の芽生えは，11カテゴリー，22のサブカテゴリーが抽出された．

４項目別にサブカテゴリー及びカテゴリーを示したものが表３である．文中においてカテゴリーは【　】，サブカテゴリーは＜　＞で表す．

①カンボジアの土地や人との交流による体験

この体験から，【日本とカンボジアの環境や教育・保健衛生への意識の違い】＜生活環境の違い＞，＜衛生に関する関心の違い＞が抽出された．学生は渡航前にカンボジアについて事前学習を実施していたものの，実際に渡航し体感することで，「保健衛生に対しての教育の仕方とかも全然違う．」，「カンボジアでは，目が痛い時は，適当にこすっとったら良いみたいな感じだった．」といった日本人との教育環境や文化の違いを体感していた．

また，【学習に対する消極的姿勢への気づき】では，「日本では……義務教育で学校に行って勉強をさせられているって子も多い」，「負けているなって」という発言からもカンボジアの人々の前向きな姿勢から自己の消極的な姿勢に気づいていた．

②保健衛生指導の体験

現地での保健衛生指導の実践により体験した内容が多く抽出された．【現地での実践への困難さ】＜効果をタイムリーに提示できない環境の困難さ＞では，「日本ではすぐに手に入り検査もすぐでき，すぐ効果も見られることが，カンボジアでは時間がかかる．」といった環境の違いの困難さを感じていた．

保健衛生指導の実施による，【健康教育の工夫と実践】＜国による慣習の違いを子ども達に伝えるために工夫＞，＜対象把握で視覚媒体を活用した健康教育を工夫＞，＜実技を加えながら実施＞といったプロジェクト対象者の把握から指導方法に関する学びや「私たちが当たり前に感じている習慣っていうものが大事」といった自分達には当たり前の保健衛生という感覚を感じていた．

さらに実践効果についても，【過去の教育支援による効果を実感し，積極性につながる】，【健康教育実施の効果を実感】が抽出され，「自分たちが実際にして変わったっていうのを感じた」，「実際に手洗いとかしていくうちにだんだん積極的になっていった」といった自己の指導によるプロジェクト対象者の変化や効果を実感していた．

③保健衛生指導の実践から得た学び

実践を行うことで，【カンボジアの人が置かれている厳しい現実への気づき】では，＜親は将来よりも今日の生活で精一杯＞，＜将来の夢はかなわない現実＞が抽出され，「夢をもっていても，親の都合だったりで就学できない」，「親からすると今日，明日の生活が大変でその後の将来まで視野に入れることができない」といった日々の生活で精一杯なカンボジアの人々の現実が見えてきていた．

それでも，カンボジアのスタッフの態度や行動に対して【カンボジアの人の学習意欲や自主性の高さへの気づき】として＜想像以上の現地の先生方の自主性に気づく＞が抽出され，「自分も勉強したいとか，進学したいっていう意思の強い先生方ばっかりだった」，「授業とかも受け身なのかって思ってたんですが，すごく質問がでてきて・・」という言葉もあり，厳しい環境の中で，懸命に学習したいという態度を感じ学んでいた．

④自覚・自律の芽生え

これらの経験を通して，【自身の置かれている環境に感謝】では，＜基本的なことを当たり前にできることに感謝を持つ必要がある＞が抽出され，「親からの育ててもらったありがたさっていう，教育のありがたさを学んだ」といった感謝の気持ちをもつことができていた．【真剣に講義に参加しなければならない】や【正しい知識を伝える責任を持った看護師になるという覚悟】では，＜看護が人に役に立てる勉強と実感し責任を持った看護師になるという意識の確立＞が抽出され，「自分達が教えた知識が伝えられていくかもしれないですから，そこで責任をもって正しい知識を伝えることをきちんとしなくてはいかない」という帰国してからの覚悟を持ったり，【国際貢献や海外の人に関わりたい】では，＜現地に行くことで，感じることや見えることを感じて交流したい＞という国際貢献に積極的に関わる姿勢を持ったり専門職としての自律に影響していた（表３）．

表３　保健衛生指導活動に参加した学生の経験

1. カンボジアの土地や人との交流による体験	
カテゴリー	サブカテゴリー
五感で体感する効果を実感	目で見ることで理解に繋がると実感
他国の人と交流することの楽しさ	知っている英単語だけで会話できる楽しさを体感
カンボジアの人の優しさを体感	カンボジア人のフレンドリーで温かく優しい雰囲気を体感
日本とカンボジアの環境や教育・保健衛生への意識の違い	国によって当たり前は違う
	生活環境の違い
	衛生に関する関心の違い
	家庭の片づけや整理の違い
	同じ国でも家庭環境や，親子の関係の違い
	日本とカンボジアの風習に違い
学習に対する消極的姿勢への気づき	学ぶ環境がないことで促進される学習意欲を体感
	学習に対する消極的姿勢への気づき
2. 保健衛生指導の体験	
カテゴリー	サブカテゴリー
現地での実践への困難さ	効果をタイムリーに提示できない環境の困難さ
	現地と日本の時間の流れの違いへの戸惑い
健康教育の工夫と実践	国による慣習の違いを子ども達に伝えるために工夫
	対象把握で視覚媒体を活用した健康教育を工夫
	こどもと親の参加で親へ意識が伝わる
	現地指導者が内容変更を提案
	実技を加えながら実施
	継続実施のための現地調達する意味を検討
	訪問によるプロジェクト対象者の理解が健康教育に生かされる
	文章理解力に合わせた教育の工夫
	生活に合わせ，実行しやすい方法を検討し実施
	継続的実施には現地で揃える必要性の気づき
健康教育実施の効果を実感	最初と比較し自己の変化を実感し積極的姿勢に変化
	実施による変化が目に見える形で確認することで実感
	知識不足や衛生習慣のなさからの消極的な態度が積極的に変化
過去の教育支援による効果を実感し，積極性につながる	カレンダーの押印で前回の健康教育の効果を実感
	期待していなかった前回の健康教育の効果を実感
3. 保健衛生指導の実践から得た学び	
カテゴリー	サブカテゴリー
カンボジアの人が置かれている厳しい現実への気づき	将来の夢はかなわない現実
	親は将来よりも今日の生活で精一杯
	現地での物品調達の難しさ
カンボジアの人の学習意欲や自主性の高さへの気づき	受け身という先入観と違う学習意欲に気づき
	想像以上の現地の先生方の自主性に気づく
	情報を得る機会，自己のスキルの低さ，情報量の少なさからの学習への意欲
	若い先生達の学習や進学への意欲
きっかけづくりが重要	気づける機会やきっかけが大事
	訪れたこと自体がきっかけ作り
対象者が主体であることの理解	対象者を主体として支えていくスタンスの重要性
	教育する前に対象を理解することが必要
習慣化することが行動変容に重要	当たり前に感じている習慣にしていくことが大切と理解
	習慣化することが行動変容に重要
対象者の興味や関心，楽しさを引き出す重要性	対象者が楽しいと思って参加できることが大事
	楽しいという意識が習慣につながる
カンボジアの人が家族を大切にすること	カンボジアの子どもたちは兄弟のことを気にかけている
家族を大切にする重要性の気づき	家族を大切にする重要性の気づき

4. 自覚・自律の芽生え	
カテゴリー	サブカテゴリー
真剣に講義に参加しなければならない	今まで以上に、真剣に講義に参加しなければならない
人や家族を大切にしよう	自分の近くにいる人や家族との関わりを大切にしなくてはという気持ちを感じる
	カンボジアの人々の家族を大切にするという姿勢や接し方
教育を受けれたり、環境が整っている当たり前に感謝	自分の当たり前は当たり前でなく、恵まれていることを実感
	基本的なことを当たり前にできることに感謝を持つ
自身の置かれている環境に感謝	教育を受け、衛生に関しての習慣化や親に育ててもらったことに感謝できる様に変化
	基本的なことを当たり前にできることに感謝を持つ必要がある
伝えようという思いを持つことが重要	相手の言語を知ること、相手に伝えようとする気持ちを持つことが大切
相手の国を知って貢献していくことが重要	活動の前に相手の国を把握しておくことが重要
	対象の国の事を知らずに教育するのは失礼な行為
国際貢献や海外の人に関わりたい	また国際交流や国際貢献に携わりたい
	現地に行くことで、感じることや見えることを感じて交流したい
	自分の知識で支援したい
	自分のベースをうまく活用して支援したい
欲求に芽生え	言葉を話せない事での億劫さ、卑屈さが楽しさやもっと知りたいという欲求に変化
病院での患者指導において経験を生かそう	患者さんの理解力に合わせて伝え楽しいと思える様に説明することを考える様になる
	病院での患者指導において経験を生かそうと考えられる
正しい知識を伝える責任を持った看護師になるという覚悟	自分が教えたことが繋がって伝えられる
	正しい知識をもち、責任を持つことを更に深く省察する
	看護が人に役に立てる勉強と実感し責任を持った看護師になるという意識の確立
日本の保健衛生についての知識や技術を発信することが自分のできること	日本の持っている知識や技術を他の国にも伝えていくことが健康につながる
	支援していくことができる技術や知識を持っていることがＰＲになる

考　　察

学生は，「保健衛生指導者育成プロジェクト」の参加経験により多くの学びを得ていた．

①カンボジアの土地や人との交流による体験

②保健衛生指導の体験

学生は渡航することで初めてカンボジアの人の生活している環境を五感で体験していた．また，ここでは日本との文化や意識を比較し違いを認識するという体験をしていた．

今回のプロジェクトでは，学生は教員とともに現地保健衛生指導者の育成のための健康教育の企画・計画・実践・評価の一連の流れを指導者とともに経験した．これにより大学の講義や演習だけでは経験できない，カンボジアでの実践の工夫や方法という技術，さらに現地で保健衛生を継続してもらうための必要性まで思考できていた．

他にも，2年間の継続的関わりにより，前回のメンバーの関わりの効果を把握し，自己の活動の意義を理解することができていた．

③保健衛生指導の実践から得た学び

保健衛生指導の実践では，カンボジアでの物品調達の難しさや，現地の人の置かれている経済的にも厳しい現実を再認識する機会となっていた．

また，日本で学んでいた保健行動の理論等を現地の実践に合わせて考えることにより，習慣化が重要であることや興味関心を持たせる必要性といった内容を実際に体感し，真にそれらに気づくという，溝上[5]のいう学生の内的知識世界に関わる学生の情動的な「学び」にもつながっていた．

④自覚・自律の芽生え

学生はプロジェクトに参加し，保健衛生指導を実践したことで多くの気づきや学びがあった．そして，それらの気づきから，真剣に講義に参加することや，人や家族を大切にしようと自己の気持ちを自覚していた．また，他国への貢献や伝えていく重要性という他者への関わりへの気づきとなり，更なる海外の人との関わりや国際貢献への関心や欲求も出てきていた．合わせて，医療職になるという覚悟や自己のできることを発信していくといった医療職としての自覚や自律の芽生えに繋がってきていた．

異文化能力を Campinha-Bacote は「文化的気づき」，「文化的知識」，「文化的技能」，「文化的接触」，「文化的欲求」で構成される[6]と述べており，学生はプロジェクトに参加することで異文化能力が向上したと考えられた．さらに小野は，個々の看護者が自己の文化に気づき，ケア対象となる人々のそれとは違うことに気づくことが，文化的知識や文化的技能の獲得につながり，看護者の異文化間能力は高まっていく[7]．と述べており，まさに今回の学生の経験から抽出された内容は同様の結果が見られた．

終わりに

新型コロナウイルス感染拡大の影響により2020年現在，本学の国際交流に関する事業は全て中断されている．今後，国際交流はオンラインの交流も検討されていくことが考えられる．しかし，学生の国際交流の経験を見ると，学生が直接，海外といった異文化の中で体感したり，目的をもち自ら様々な経験をしたりすることで多くの学びを深めていることがわかった．オンラインは世界中を簡

易につなげることができる方法ではあるが，それのみでは，深まらない経験や学びはあると考える．今後，新時代の国際交流の在り方を検討していく必要がある．

参考・引用文献

1）香川県立保健医療大学：基本理念・教育目標, 2020－9－30，https：//www. kagawa-puhs. ac. jp/about/profile/idea. php

2）外務省，外交政策，2020－9－30, https：//www. mofa. go. jp/mofaj/gaiko/ohrlls/ldc_teigi.html

3）経済産業省：平成31年度国際ヘルスケア拠点構築促進事業（国際展開体制整備支援事業）医療国際展開カントリーレポート新興国等のヘルスケア市場環境に関する基本情報 カンボジア編，2020−9−30, https：//www. meti. go. jp/policy/mono_info_service/healthcare/iryou/downloadfiles/pdf/countryreport_Cambodia. pdf

4）エリザベスT. アンダーソン, コミュニティアズパートナーモデル，第2版，医学書院，東京，2007.

5）溝上慎一“大学生の学び・入門　大学での勉強は役に立つ！”，有斐閣，東京，2006.

6）Campinha-Bacote J. The Process of Cultural Competence in the Delivery of Healthcare Services：A Model of Care. J Transcultural Nursing 13(3)：181－184，2002.

7）小野聡子，山本八千代. 看護者の異文化能力に関する文献検討．川崎医療福祉学会誌 20(2)：507－512, 2011.

Students' Experiences in Health and Hygiene Guidance Activities in Cambodia

Yoshimi Tsuji[1)*], Akie Kobayashi[1)], Yoshiko Miki[2)], Mikiko Hori[1)], Tatsuya Morinishi[3)]

[1)] *Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences*
[2)] *Faculty of Human Health and Welfare, Department of Nursing, St.Catherine University*
[3)] *Department of Medical Technolpgy, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences*

Abstract

From 2017 to 2019, focus group interviews (FGI) were conducted to elucidate the experiences of five students who participated as assistants in a "health and hygiene instructor training project" in Cambodia. The student's experiences were consequently classified into the following four items.

(1) Experience from interacting with the Cambodian land and people
Students experienced the different educational environment and culture from that of Japanese people and became aware of their own negative attitude by experiencing the positive attitude of the Cambodian people.

(2) Experiences from practicing health and hygiene guidance
In practicing health and hygiene guidance, students understood that health and hygiene, which is commonplace in Japan, is different in Cambodia. Students realized the effects from their experience in preparing, planning, and practicing health guidance.

(3) Gained from the practicing health and hygiene guidance
Students saw the reality of the Cambodian people, who are fully occupied with their daily lives. Despite this, the students felt that the Cambodian staff earnestly wanted to learn.

(4) Awakening of awareness and autonomy
The students were prepared to participate in lectures seriously and become responsible nurses. Furthermore, the students developed professional autonomy and the desire to be actively involved in international contributions.

In international exchanges, direct hands-on experiences within a different culture and having a variety of purposeful experiences by oneself were found to promote student awareness and autonomy.

Key Words：international exchange, health and hygiene, student, experience

*Correspondence to : Yoshimi Tsuji, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences, 281-1 Hara, Mure-cho, Takamatsu, Kagawa 761-0123, Japan
E-mail : tsuji@chs.pref.kagawa.jp